

在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究の動向

Trends in Research Related to Cross-cultural Adaptation of Muslim Students in Japan

中野祥子・奥西有理・田中共子
NAKANNO, Sachiko, OKUNISHI, Yuri & TANAKA, Tomoko

1. はじめに

昭和58年に「留学生10万人計画」が策定されて以降、来日する留学生の数は過去30年間で約13倍に増加した。日本に滞在する留学生の数は平成25年5月1日現在で135,519人にのぼる（日本学生支援機構, 2014）。平成20年には、在日留学生の数を平成32年までに30万人受け入れることを目標とする「留学生30万人計画」が策定され（文部科学省, 2008）、今後ますます、日本の大学教育の場で多様な文化背景を持つ留学生が増えると予想される。文部科学省は「留学生30万人計画」の骨子の考え方に基づく具体的方策として、「優れた留学生の戦略的な獲得」を挙げ、よりアカデミックレベルの高い学生の確保に重点を置いている（文部科学省, 2008）。

一方、留学生の課題は、学生として学業を達成することだけでなく、異文化に適応したり母国文化を伝えたりする文化的な面もあると考えられている（田中, 2000）。確かに留学生にとって学業の達成は重要な課題であり、そのためには心身の健康の確保も必要である。しかし、留学の醍醐味は先進的な学問の取得だけではなく、異文化交流による新しい価値観の発見や、異文化環境での適応能力をつけること、文化背景が異なる人との生活の中で工夫して困難を乗り越えることにもあろう。

在日留学生の異文化適応に関する問題は、留学生の増加に伴い注目されるようになった。その研究内容は、在日留学生研究の草分けとなる留学生の対日イメージ調査（岩男・萩原, 1988; 徐, 1996）から始まり、異文化接触に関するもの（浅野, 1996; 江村, 1993; 神谷・中川, 2007; 佐々木, 1997; 横林・羅, 2010）、不適応の原因を究明するもの（福田, 1995; 井上・谷・土屋, 1997; 鈴木, 1997）や学業面、経済面、対人関係面など、様々な側面での困難を扱ったもの（岡・深田, 1994; 湯, 2004; 田中, 1995; 田中・藤原, 1992）、異文化適応に影響する要因を検討するもの（樋口, 1997; 水野・石隈, 1998; 佐藤, 1996; 齊藤, 1995; 孫, 2009 a, b; 葛, 1999）、また、異文化適応の促進効果が期待されるソーシャル・スキル（奥西・田中, 2007; 田中, 1997; 田中・畠中・奥西, 2011）及びソーシャル・サポートに関するもの（岡・深田・周, 1996; 田中, 1998; 田中, 2000; 奥西・田中, 2008）など、多岐に渡っている。留学生の心理的安定をめざす視点から、異文化間の移動における抑うつやストレスの様態、不適応の原因究明が進められていく中で、在日留学生が異文化接触場面で経験する葛藤や困難の内容は、ホストとの対人関係にまつわるものが多いことが明らかになった。それを受けて、対人面での困難をいかに

理解し解決に導くかという文化学習や、ホストとの意思疎通や対人関係を円滑にするソーシャル・スキル、ソーシャル・ネットワークやサポートを含む、ホストとの関わり方に関心が高まり、社会文化的要素に注目した研究の蓄積がなされてきた。そこから異文化適応への影響要因は、日本語力やパーソナリティなど留学生自身の個人的な要因に留まらず、来日後のソーシャル・ネットワークの形成やホストとの関わり方も適応を左右する要因であるとの主張が展開されるに至った。これまでの調査結果は、在日留学生がホストとの関係構築を試みるうえで様々な異文化葛藤に直面し、その対処に迫られていることを示している。葛藤や困難への対処を講じる上で、日本文化に歩み寄る姿勢を見せたり日本文化に即した行動を試したりすることで、周囲のホストから好感を持たれたり、誤解のない円滑な意思疎通をはかったりする機会ができるなら、それはホストとの交流を進めていく方策の一つになる可能性があるといえるだろう。

ただしこれら在日留学生に関する研究は、対象である留学生をひとまとまりに捉えたものが多い。出身国ごと、つまり文化ごとに検討したものは、在日留学生の最多数である中国人留学生を対象とした研究（石原, 2011; 葛, 2003, 2007; 岡・深田・周, 1996; 佐々木・張・鄭, 2012; 孫, 2009a, b, 2011; 周, 1993; 湯, 2004）が中心である。その他には、東洋と西洋など、大まかな地域にわけて考察されたものがある（浅野, 1996; モイヤー, 1987; 田中, 2000; 田中ら, 1992）。イスラム教徒の学生やベジタリアンの学生など、特徴的なニーズを持つ学生については、他の一般の留学生と共に調べられた研究の中で、補足的に少数の事例として紹介されることはあるものの、精緻な考察というよりは事例的な解釈がなされるに留まっている（浅野, 1996; 奥西ら, 2008; 田中ら, 1992）。

留学生の持つ文化背景が異なれば、日本文化との異文化接触において直面する葛藤の内容や、葛藤発生から解決に至るまでのプロセス、必要とされるソーシャル・サポートやソーシャル・スキルが異なる可能性もあるだろう。留学生の持つ文化ごとに焦点を当てて詳細に検討していくことは、それぞれの留学生に合った適応へのアプローチの仕方を見出すことを可能にするという意味で、少なからぬ価値のある試みといえる。実際に、いくつかの研究における知見からは、出身地域による文化背景の違いによって、日本文化に対する異文化葛藤の内容や困難事例の内容、適応の促進に有効な要因が異なることが示されている（浅野, 1996; モイヤー, 1987; 田中, 2000; 田中ら, 1992）。多様な留学生の受け入れにより、今後ますます多文化化することが予想される日本の大学において、留学生の背景にある文化に焦点をあて、小集団の留学生に目を向けることは重要な課題の一つに数えられよう。

在日留学生の出身地は、多くの国や地域に渡る。また出身地のみならず、民族や宗教も様々である。ある国の文化という括り方だけでなく、国の枠を超え、同じ宗教によって影響を受けた文化という捉え方も可能であろう。在日留学生の出身地の統計資料を見てみると、多様な文化背景を持つ学生たちの中でも、イスラム圏からの学生が多数在日していることがわかる。インドネシア、マレーシア、バングラデッシュ、サウジアラビア、イラン、ウズベキスタン、エジプトなど、ムスリム¹人口が全人

¹ イスラム教信者のこと

口の過半数いるとされている国々²からの学生数を単純に見ると、7千人弱が在日留学生として滞日している計算になる（日本学生支援機構, 2014）。中国やインド出身の学生たちの中にも、イスラム教を信仰する者は少なからずいるかもしれない。もちろん、ムスリムが多い国からの留学生が全てイスラム教信者とは限らないし、その他の国からムスリム留学生が来日することであろうが、実際のところ相当数のムスリム留学生が滞在しているであろうことが推測できる。この意味で日本の大学においてムスリム学生は、いまや身近な留学生となってきている。

こうした流れの中で、宗教に基づいた特有の行動様式を持つとされる、彼らの生活スタイルへの注目も高まりつつある。在日ムスリム留学生が持っている信仰上守るべきとされる行動様式については、以下のことが主な特徴として語られることが多い。唯一の神であるアッラーを信じることから始まり、アルコールや豚肉及びイスラム教で定められた方法で処理されていない鶏肉、牛肉の飲食の禁止、1日5回の礼拝習慣、少なくとも年に1度の断食の実施、等々、日常生活に密着した行動様式などがある（赤堀, 2003; イスラム文化センター, 2005, 2009; 岸田, 2009）。社会も大学も社会文化的に、こうした特有の行動規範を持つムスリムへの理解と対応が必要とされはじめている。しかしながら、前述の通り、在日ムスリム留学生に焦点を当てた研究は少なく、留学生一般の中の特殊例として事例的な紹介が散見されるに留まっており（奥西ら, 2008; 田中ら, 1992など）、彼らの異文化適応像に関しては検討の余地が大いに残されている現状にある。

2. 本稿の目的

本稿は、在日するムスリムの留学生、移民及び就労者を対象にした研究の中から、心理学的な視点で異文化適応を捉える上で示唆となり得る知見を提供する先行研究を概観し、研究の視点と得られた知見を整理して、在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究上の課題を探ることを目的とする。特に、在日留学生の適応に関する先行研究においても関心の高い、異文化接触場面において生じる問題やホストとの関わり方、異文化適応促進の鍵となり得るホストとゲストの関係の在り方、そしてそれはどのように構築されていくのかなど、社会文化的な要素に着目する。これまでの研究の動向を把握した上で、どのような視点からの研究が不足し、どのような点の解明と知見の蓄積が望まれるか、研究上の課題を論じていきたい。

3. 在日ムスリムに関する先行研究

在日ムスリムを対象とした研究は、心理学的な視点の他に、社会学の視点からムスリムコミュニティの解明や生活の実態を探ったり、経済学的観点でムスリム移民の日本での職業やハラール³食

² THE PEW FORUM ON RELIGION & PUBLIC LIFE Muslim Population by Country (Percentage of 2010 population that is Muslim) <http://features.pewforum.org/muslim-population/?sort=Percent2010> による。

³ イスラム教で信仰上認められているもののこと

品の需要について調べたりするもの、文化人類学的な視点から国際結婚やムスリムの価値観の形成に焦点をあてるものなど、様々な視点から展開されている。ただし異文化適応研究に限らず、心理学的な視点から在日ムスリムを対象に調べる研究自体は、僅少である。しかし、在日ムスリムの異文化適応について心理学的に探ることを目的として掲げていない研究の中にも、日本文化との異文化接触上の困難や、日本社会で信仰を持ちながら生活していく上での工夫、日本人との関わりについての事例などを扱ったものは見られる。これらの中に、ホストとの対人関係の構築の側面から異文化適応を心理学的に考える上での示唆を与える、貴重な知見が点在している。在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究の蓄積が捗々しくない状況から鑑みても、在日ムスリムを対象とした研究を丁寧に読み解き、関連する知見を拾得して心理学的な観点から整理していくことは、彼らの日本文化適応への道筋を読み解く手がかりを提供するという意味で、意義深い営みといえるだろう。

異文化適応研究に関連する知見を含むものには、日本での生活の実態を探ろうとする研究（樋口・稲葉・丹野・福田・岡井, 2010; 店田・村田・高橋・石川・岡井・北爪, 2006）や心理学的な視点を組み込んで異文化接触上の問題を扱う研究（アフタモヴァ, 2012; 中村, 1983; 井上, 1999）などがあるが、いずれも移民や就労者を対象とした研究が中心である。その他にはムスリム児童を対象にしたもの、ムスリム男性と日本人女性との国際結婚に焦点を当てたもの（工藤, 2009）がある。在日ムスリムの生活の実態を調査した研究のひとつとして、樋口ら（2010）は、在日ムスリムが日本で誰とどのように付き合っているのか、彼らのネットワークについて調べている。そこでは、在日ムスリムは日本人の友人よりも、同国人の友人を多く持ち、中でも特にムスリム同士の関係が深いことが報告されている。モスクでの定期的な集まりを契機にムスリム同士のネットワークを広げ、関係を維持しているという。日本での友人関係については、在日ムスリムの日常生活について広範囲に調べた店田ら（2006）にも報告がある。彼らは留学生を除いた男性のムスリムを対象に、首都圏に位置するモスクを中心に、在日ムスリムの生活意識と適応に関する質問紙調査を行い、在日ムスリムの友人関係を調べた。その調査では、日本人の友人の数は「10人以上」という回答が半数近くを占め、同国人やムスリムの友人になると、「10人以上」という回答が7割近くとなり、友人数は決して少なくない、と述べている。さらに、店田ら（2006）は、日本人との付き合いに対する満足度についても尋ねている。日本人との付き合いに「非常に満足」と「どちらかといえば満足」を合わせて、ほぼ7割から8割程度に上るといふ満足の数値を示し、また同じく同国人やムスリムとの付き合いについては9割近いという満足の数値を示したという。日本人との付き合いにある程度満足しているとの結果は、拾得すべき知見であるが、ムスリム同士の方が満足を感じる割合が高い理由や、どの程度の対人関係を形成し、それを満足としているかなどの、対人関係の様相や関係構築のプロセスについては未詳である。さらに、同調査では適応度についても尋ねられており、日本での生活に「適応している」と回答する者が8割を超えたことが示されている。これは在日ムスリムの日本社会への適応を知る手掛かりとして有用な結果ではあるが、どの側面からみて適応しているかについての具体的な検討はみられない。彼らの悩

みや心配事について、予め困難項目を選択肢として複数挙げ、あてはまるもの全てを選択するように回答を求めた結果、言葉が通じないこと (38.3%) が最も多く、次いで、食べものに関して (36.2%) の回答が多かった。他には母国の治安と経済 (32.3%)、子供の教育 (30.9%)、母国の家族 (26.8%)、家族と自分の健康 (20.8%) についてなど、母国にいる親類を含め、家族についての問題が比較的上位を占めていた。文化の違いやホストとの対人関係に関する悩みや心配事についての項目を選んだ回答者の割合を見てみると、日本人の考え方 (18.8%)、日本の習慣 (14.1%)、地域の間人関係 (16.8%)、職場の間人関係 (10.1%) と、他の心配ごとと比べて少ないものの、ホストとの対人関係や日本文化との差異に悩んでいる者がいることがうかがえる。これらは自由記述により尋ねられたものではなく、予め困難項目を設けたうえで尋ねられたものであるため、困難のバリエーションも乏しい。困難内容の詳細や下位分類を明らかにすることが、今後の研究課題の一つになろう。上記の調査のインフォーマントの年齢層と滞在年数は、年齢は10代から60代までと幅広く、滞在期間も5年以上の割合が高く、中には10年以上の者も多数おり、比較的長期間の滞在である。加えて全て男性のムスリムから得られた知見であることを念頭に置いて、解釈する必要がある。男女差が対人関係の深さや、適応に関して満足を求める度合い、困難の内容に影響を与えることも考えられるだろう。

一方で、ホスト側の日本人を対象としたイスラム教及び在日ムスリムに対するイメージや意識に関する調査も実施されている (岡井・石川, 2011; 店田・岡井, 2011)。そこでは、日本人が抱くイスラム教に対するイメージや知識は多岐に渡ることが示されている。日本人住民を対象にイスラム教に対する意識について調べた岡井ら (2011) では、日本人による、例えば「平和を重んじない宗教」、「攻撃性が強い宗教」、「寛容ではない宗教」、といった、イスラム教に対するネガティブなイメージが散見された。また、外国人に対する意識調査の中で、イスラム教徒についても調べた店田ら (2011) では、イスラム教に関する知識の習得に対して日本人側の意欲が低いことが示されている。「イスラム教についてもっと知りたいと思うか」との問いに、「あまりそう思わない」及び、「まったくそう思わない」と回答した者が7割を越えていた。加えて、ムスリムとの付き合いに関する問いでは「ムスリムとうまく付き合えるとは思えない」という日本人回答者が7割を超え、消極的なホスト側の見解が報告されている。前述した店田ら (2006) において、7割以上のムスリム回答者が日本人との付き合いについて満足していると示した結果から考えると、日本人側とムスリム側の双方で、付き合いや適応に対する期待度が異なる可能性、あるいはお互いが適応や対人関係に求める基準に違いがある可能性が示唆される。

心理学的な視点から異文化接触上の問題を扱った研究では、ムスリムの心理的ストレスに関する研究 (井上, 1999)、日本社会との異文化接触に関する研究 (アスタモヴァ, 2012; 工藤, 2009)、宗教的価値観の形成について調べた研究 (服部, 2007) がある。心理学的な視点から行われた研究としては、井上 (1999) が、日本におけるアジア系ムスリム就労者56名を対象に面接調査を行い、彼らのストレスとその対処法について調べ、彼らがムスリム特有のストレスと対処法を有しているということを目指

摘している。井上は、彼らによって語られたストレスの内容を12の領域に分類し、そのうちの文化様式と人間関係の2つの領域において、ムスリム特有の宗教に基づいた行動規範と日本文化の行動とのはざままでストレスが生じていることを示した。文化様式の領域では、日本人の飲酒の習慣、男女の役割の違い、若い男女の付き合い方の違い、家族関係のあり方の違い、日本人がイスラム教の習慣に対して無理解であること、が彼らにとってのストレスとして挙げられている。人間関係の領域では、ムスリムが日本人との友人関係や信頼関係の形成に難しさを覚え、そこにストレスを感じていることが報告されている。例えば、日本人は口で言うことと、心の中で思っていることが異なるなど、日本式の対人ルールに接した際に戸惑いや葛藤が生じることが示されている。在日ムスリムが日本人との関わりの中で、異文化性に基づく葛藤や戸惑いを経験していることを示している点が注目される。さらに、井上(1999)は、彼らが行ったストレスへの対処方略を6つに分類し、その中の、「状況について考えないこと」、「宗教的価値基準を適用すること」、という対処において、ムスリムの信仰が活用されているとして、これらをムスリム特有の対処方略であると指摘している。具体的には、異文化葛藤場面に遭遇した際、状況について考えずに母国のやり方をそのまま維持したり、「お祈りをして戒律を守っているのだから、どんな試練がふりかかろうとも、それは神の意志である」として状況を全面的に受容したり、祈ることでストレスを解消させたりするといった独自の対処方略を実践していた、と述べられている。

これらの研究結果からは、在日ムスリムがムスリム文化と日本文化との接触により葛藤を起こしていること、在日ムスリムが独自の日本文化適応を試みている可能性が浮かび上がる。この結果を、ムスリム留学生に置き換えれば、ムスリム文化と日本文化の接触場面でどのような異文化葛藤が起きるのかを検討する際に、注意深く見ていくべき領域を示唆する情報とみることができる。なお、ストレスへの対処方略として、祈ることでストレスになる事柄を忘れるようにしたり、考え方を変えるなどの認知的対処が用いられていることも興味深い点である。留学生活においてもこうした対処がみられるなら、学生生活の中でその方略はどのようなものなのかが注目される。

この他にも、ムスリム就労者を対象とした心理学的研究として、日本社会との邂逅を異文化接触の視点から捉えた研究がある。日系企業で働く在日ウズベキスタン・ムスリムの異文化葛藤に焦点をあてた、アスタモヴァ(2012)は、ムスリム就労者が会社での飲み会や酒を交えた顧客との付き合いに対して抵抗を感じていることや、日本人の同僚がイスラム教に関して無理解であるために、仕事後の飲み会を断るムスリムに対して、付き合いが悪いと思ひ込むといった誤解が生じることを報告している。そして彼らの日本文化への適応に関する考察として、ムスリム側は宗教的価値観や習慣を貫き通そうとすることに終始するのではなく、自分が属する日本企業の中で、目の前の日本人との関係の発展を望む意識を持ち、日本文化のやり方に対応できる資質を高めていくことが必要だと提言している。この研究は、大学という場で留学生を対象としたものではないが、彼らの習慣ゆえに日本人との付き合いにおいて何らかの誤解や困難が生じるのだとしたら、大学でも同様のことが生じる可能性がある

う。また、職場での異文化接触に関して、ムスリム側が自らの信仰行為を柔軟に捉えて日本文化に歩み寄ることを、適応上の課題として指摘している点は興味深い。日本の企業で組織の一員として働く就労者の場合は、日本人のやり方に合わせるよう求める環境の圧力が高いのかもしれないし、そうすることに仕事上のメリットが高いのかもしれない。就労者に比して自由度が高く、日本人だけでなく他の国の留学生との付き合いも持つなど、多様な交流が展開できる留学生の場合は、困難や葛藤を感じる事柄やその度合い、実践可能な対処方略が微妙に異なってくる可能性はあるだろう。しかしながら、このような困難への対処については提言が述べられるに留まっており、ムスリム就労者たちが実際にどのように対処を講じることで、両者の関係構築がなされているのかについては未詳である。ムスリム文化と日本文化との異文化接触をめぐる困難については、工藤（2009）においても、パキスタン人ムスリムと日本人女性の国際結婚の事例を素材に、知見が蓄積されている。工藤は、非ムスリム社会である日本社会との関係のあり方に焦点を当てて聞き取りを行う中で、日本人との対人関係において、良好な関係を強調しつつも、同時に困難も抱えていることを明らかにしている。例えば、親しくしている日本人でも、ムスリムでなければ宗教的なことが分かってもらえない部分があるという、ムスリム滞在者の事例を紹介している。あるインフォーマントは保育園の他の保護者たちに、豚肉を食べないことに拘っていると子供の性格がゆがんでしまうのではないかと指摘されたことに傷つき、結果的に子を退園させ、その相手とは付き合いなくなったという。また、ムスリム男性との結婚を期にイスラム教に入信した日本人女性たちは、日本社会においては、周りの日本人と同じように非ムスリムの単なる「日本人」として規定されるために、他の日本人との間で宗教的差異について慎重に交渉しなければならないことに困難を感じていた。そして自分の立場は、外見を「外国人」として認識される夫とは違うと認識していた。ムスリムの日本人妻は、日本を「“ひとそれぞれ”が許されない社会」と捉え、日本でムスリムとして生きる場合の生きにくさを強調していた。周囲と異なる行動をとりにくい社会であると実感する彼女らは、その対応策として、宗教にはふれずに日本の文化規範との差異を最小限に留める傾向にあったと報告されている。例えば、子供のお弁当の中身はハラールな食材に変えても、外見そのものは他の児童が食べるものと同じに見えるように努めていた。さらに、彼女達は地域の人たちとの関係を円滑にするために、常に周りに積極的に声をかけていく必要性を感じ、実践を心がけていると語っていた。これらの逸話は、ムスリムが表面的には日本人ホストとの良好な関係を示しているように見えても、様々な葛藤が生じることを示唆している。自らの宗教的实践を水面下で保持しながら、可能な範囲で表面的にホスト文化に合わせる対処方略は、在日ムスリムの適応へのアプローチのひとつとして捉えることができるかもしれない。しかしながら、困難事例に言及されてはいても、心理的な葛藤や困難発生に至るまでのプロセス、地域の非ムスリムとの間に感じた差異や困難が文脈の中で発生する機序などは、詳細な分析や考察がなされておらず、その解明が望まれる。

服部（2007）は、在日するインドネシア人ムスリムの児童における宗教的価値の形成と、在日ムス

リム児童の教育問題を実証的に探っている。そこでは、ムスリムの児童が学校生活を送る上で、給食、断食月への配慮、宗教的要素を含む学校行事への参加、の3点が切実な問題となることが述べられている。併せて、問題に対して彼らが実践している対処も報告されている。例えば給食の内容への対処として、ムスリムの保護者はまず献立を確認し、宗教上禁じられている食べものがあれば、代わりにお弁当を作って持たせていた。教員のなかには理解を示し、積極的に食品の成分を教えてくれる場合もあるが、宗教に基づく保護者の説明に理解を示さない教員もあり、その場合、保護者たちはアレルギーとして教員への理解を求めているという。断食時の給食への対処では、ムスリムの保護者は、教員からの理解を得ることが難しいからと、理解を求めることを最初から諦め、体調不良という理由で給食を回避する場合があった。宗教的要素を含む学校行事への参加についても、対応が工夫されている。日本の学校では、七夕や節分、雛祭り、クリスマスなどの行事を宗教的な行事として実施しているわけではないが、これらの行事は、ムスリムの保護者からは宗教的な行事として捉えられる場合があった。ムスリムの保護者の中には、これらの行事の準備段階は、子どもの教育に役立つ側面もあるとみて参加させても、行事当日は子どもを休ませるとする方法をとる者がいた。日本の学校教育においては、入学を許可された生徒は、外国籍の子どもであっても日本の子どもと同様に扱うことが原則とされ、日本の学校へのいわば同化的な順応が基本的原則とされがちなため（太田, 2000; 宮島・太田, 2005）、学校に通うムスリム児童の場合は、困難の完全な回避は難しいようである。そうした中でも、周囲からの理解を得やすい理由を示しながら、日本文化的なやり方に馴染むような対処方略をとっていること、そしてその対処方略には、回避的な方法から融和的な方法までバリエーションがみられたことも注目すべき点といえよう。

在日ムスリム留学生を対象とした調査は多くはないが、宗教的特徴の把握やニーズ調査（岸田, 2009, 2011; 溝部, 1990; 名古屋大学留学生センター, 2012）と心理的視点を取り入れた研究がみられる（森永・杉万, 1993）。ムスリム留学生の宗教的ニーズ及びニーズへの大学側の対応に関しては、岸田（2009）の報告がある。そこでは、留学生数が100名を超える国・公・私立大学70校を対象として、ムスリム留学生の宗教的ニーズに大学側がどのように対応しているのかを、礼拝場所の確保とハラールフードの提供について調査している。なおムスリム学生が礼拝するための部屋を提供しているとする大学は70校のうち6校、食堂や生協でハラールの食事を提供している大学が6校となっていた。さらに、こうした策の実施には至っていないものの、ムスリムの宗教的ニーズへの対応は重要であると考えられる大学は、全体の6割超となっていた。岸田（2009）はムスリム学生への宗教的配慮はまだ不十分であると述べているが、少なくともムスリム留学生の宗教的ニーズが、日本の大学において注目されはじめてきたとはいえよう。これらは目に見える比較的わかりやすいニーズへの対応として重要であろう。だが在日ムスリムの日本での留学生生活を考える上で、宗教的実践を行いやすくすることの他に、一体どのような対応が必要になってくるのか、そしてムスリム学生と日本人が交流する上でのムスリム学生側のニーズには何があり、ホストにはどのような対応が望まれるのかは、十分検討されていると

は言い難い。まずは文化的な葛藤や困難とその対処を詳細に解き明かしていくことが、彼らの適応像の解明へとつながり、有効な適応支援の手がかりとなっていくものと考えられる。

田中・ストラム (2013) は、大学の留学生相談室に寄せられたムスリム学生たちからの相談内容と、大学の対応を報告している。彼らは礼拝場所の確保や食事の成分確認に必要な情報をスムーズに掴むことに難しさを感じたり、礼拝をしている姿について周りから奇異な目をむけられるのではないかと不安を感じたりしていた。加えて、礼拝場所の確保の問題は意外と複雑で、彼らの悩みは、礼拝する場所が見つければ解決するというわけではなかった。空き教室を利用して礼拝しているところをたまたま目にした非ムスリム学生が立ち去ってしまうことに対し、申し訳なさを感じたり、許可をもらっていない空き部屋の使用に対して、後ろめたさや不安を抱えたりしていた。また、食事に関する困難についての報告もある。彼らは大学の食堂で食べ物を選ぶ際、信仰上禁止された食材が入っていないかを確認しようとして、食堂で給仕しているスタッフに尋ねることがある。それが結果的に、レジなどに待っている他の人たちの列を止めてしまうことに対して、申し訳なさを感じていた。特に混雑時には相手に声が届きにくく、その状況で日本語を使って会話するには、いっそうの時間がかかってしまう。自らの宗教的ニーズを満たす為に必要な情報はほしいが、周囲の日本人には迷惑をかけたくないという気持ちがあり、彼らはその狭間で葛藤を感じていた。そこで彼らはハラールの食であることを示す表示をしたり、メニューに入っている食材を表示したりしてほしいと希望した。その背景には、礼拝の場所の例と似て、信仰を守ることで周りの人々の迷惑にならないようにしたいという気持ちがある。彼らは、自らが宗教的实践を滞りなく行えばそれでも満足なのではなく、非イスラム社会である日本において、宗教的实践を行う自分たちの異質さを客観的に捉え、ムスリムではない日本人との関係性を壊さないよう、遠慮しながら信仰を保持しているかのようにみえる。イスラム教ではコーランに定められた生活の中の規定を可能な限り守るよう教えられているが、そのために他の人に迷惑をかけたり、自らの健康や命を脅かしたりするようなことはしてはならないと教えられているという (名古屋大学留学生センター, 2012)。田中ら (2013) は、ムスリム学生たちが、自らの宗教的ニーズを無理に通そうとすることなく、周りへの配慮も考えあわせながら、柔軟に話し合いと交渉を進めている様子を報告している。これらの事例は、守るべき信仰上の規範を持つムスリムも、信仰を保持しつつ、ある程度柔軟に対応できる面があることを示唆している。また、彼らの調査では、大学生協や学生に対して、宗教上の戒律に関する理解を「3年越しで」促していったところ、順番待ちの列を止めることなくハラール食を注文できるようになったという逸話を紹介している。そこにいたるまでの話し合いの中で、ムスリムと日本人との間で相互理解が深まったと述べ、ホストの日本人側もムスリムについて理解を深めそれを示すことで、関係の発展がはかれると考察している。

ホストである日本人側がムスリムについて理解することの重要性にも、関心が向けられ始めている。名古屋大学留学センター (2010) は、ムスリム学生の増加を受け、宗教専門家、学生、教職員が協働してムスリムの学生生活の基本的な事項を紹介する資料を作成している。宗教的な特徴をまとめた上

で、ムスリム留学生側のニーズを想定し、ムスリム留学生を受け入れる際に日本人側が配慮すべきことを提示している。例えば、1日5回の礼拝習慣に特定の祈り部屋が必要とされることや、飲酒の制限により、ムスリム留学生が参加する歓迎会や忘年会などの飲み会ではノンアルコール飲料を準備するなどの配慮が必要とされること、断食月は体力や思考力が低下するため、研究のペースが落ちてしまうことへの理解が必要であることや、結婚前の男女の付き合いにおいて距離を保った接し方や場所分けなどの配慮が必要な場合があることなどを挙げている。すなわち非ムスリムの日本人とムスリム学生が、共に学生生活を送る上で日本人側が戸惑う可能性のある出来事を中心に、彼らの信仰に基づいた価値観や行動規範を丁寧に解説し、ムスリム学生と付き合う時に配慮が望まれることについてまとめている。彼らの宗教について、単に情報を羅列するのではなく、日本人とムスリム学生の関わり合いの中で生まれる齟齬を想定して、日本人側への助言がまとめられている点新しい。これらに紹介される事例は、彼らが日本文化との異文化接触をしていく場面において、起き得る事態を予測させる示唆的な資料となっている。そしてムスリム学生と日本人との対人関係の構築にあたって、日本人側が心得るべきことを挙げた見解としても意味深いものがある。

ムスリム留学生を対象とした数少ない心理学的研究の1つとして、森永ら（1993）がある。彼らは日本人大学院生とムスリム留学生大学院生を対象にペア調査を行い、相互の宗教意識・行動の差異を検討することによって、イスラム教の宗教的特徴を明らかにしている。ここでは、ムスリム留学生にとって自明な意識や行動と、日本人学生にとって自明とされる意識や行動との間に齟齬が生じていることが示されている。そしてそれが、ムスリム留学生の日本社会への適応を困難にする原因の一つと考察している。日本人にはないムスリム留学生の特徴的な行動としては、銭湯に行かないこと、既婚女性は男性と親密に話をしないこと、普段から宗教を意識することなどを挙げている。そして、ムスリム留学生を迎える側の日本人学生は、ムスリム留学生の意識や行動の違いだけでなく、その違いの奥にある宗教的な意味合いの違いも考慮しなければならないという意見を述べている。そして日本人が、こういった意識や行動の違いをあまり意識せず、イスラム文化についてあまり知識を持ち合わせておらず、理解が不足していることなどが原因となって、交流が阻まれたり、対立や葛藤を起したりする可能性があるとして述べている。この調査では、日本人学生とムスリム留学生の交流を阻む可能性があるものとして、認識や行動の差が取り上げられている。この調査から20年近く経った現在では、インターネットの普及やムスリム留学生の増加により、宗教に関する、日本人学生側の意識や行動もいくらか変化している可能性があるだろう。発展的な課題として、日本人とムスリムの宗教的な意識や行動の差異が実際に両者の関係性構築を阻むのか、関係の質にどのような影響を与えるかなどの、関係性の実証的研究が待たれる。

4. まとめ

本稿は、在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究上の課題を探るため、数少ない在日ムスリ

ム留学生、在日ムスリム移民及び在日ムスリム就労者を対象とした、異文化適応に関連する先行研究を概観してきた。総じて、ムスリムの宗教的ニーズや信仰に由来する特徴の把握、生活の実態を幅広く調べてまとめたものが多い。一方でムスリム留学生を対象に、心理学的な視点から日本での適応像を分析する研究は僅少であった。だが僅かな研究の中に、社会文化的な要素を含む適応の様態を掴む手がかりが散見される。比較的多い報告は、ムスリムが独特の宗教的ニーズを持ち、日本文化との接触場面において、宗教的実践のやりにくさを感じたり、宗教的価値観や行動規範の違いから、ホストとの交流において葛藤や困難を感じたりしているとしたものだが、一方でその困難の発生過程の分析や実施可能な対処方略に関する分析は詳しくない。彼らの宗教の影響を受けたものの考え方や価値観及び行動が日本文化と接触した際に、どのような事態が起こるのか、葛藤や困難が起きた際にはどのような対象方略を講じることでそれを乗り切っているのか、あるいは何もしないのか、詳しく分かっているわけではない。細かい視点から葛藤及び困難の発生プロセスや解決への道筋を読み解き、ホストとの関係構築がどのようになされているのか、緻密に分析していくことは研究上の課題といえる。授業や研究や課外活動などが続く大学生活の中で、ホストとの交流が不可避であるムスリム留学生と、職場においては総じてルールの統一が望まれる日系企業で働くムスリム就労者とは、その異文化適応の課題や適応方略などが、違いを含んだものになっているかもしれない。在日ムスリム留学生に焦点を当てた時、彼らにとっての適応上の課題や適応方略は、具体的にはどのようなものか。そして在日ムスリム同士のネットワークの広さや関わりの頻度の高さは指摘されているが、それらは彼らの日本文化適応に影響を与えるのか、与えたとしたらそれはどのような側面で、どの程度のものなのか。そもそも在日留学生研究において示されているような、ホスト文化の理解や文化規範の習得などに代表される、ホストへの歩み寄りが適応に有利にはたらくとする社会文化的な適応観は、在日ムスリムの場合にも成り立つのか。先行研究から得られた知見や示唆の上に、浮かび上がった課題について検討していく必要がある。ムスリム文化と日本文化との異文化接触時にみられる一つ一つの現象を、心理学的な視点から読み解いていく研究の蓄積が待たれている。

引用文献

- アフタモヴァ イローダ (2012). 日本企業で働く在日ウズベキスタン・ムスリムからみた異文化葛藤と異文化教育の課題についての事例的研究 上智大学教育学論集, 46-59.
- 赤堀雅幸 (2003). 禁じられた食べ物 後藤晃・山内昌之 (編) イスラームとは何か 新書館 pp. 198-199.
- 浅野慎一 (1996). アジア人留学生・就学生の生活と文化変容 (3) 神戸大学発達科学部研究紀要, 4 (1), 109-138.
- 江村裕文 (1993). 留学生の異文化適応 法政大学教養部紀要, 89, 1-11.
- 福田一彦 (1995). 外国人留学生の適応障害とその援助 全国大学メンタルヘルス研究会報告書, 17,

103-105.

- 服部美奈 (2007). 在日インドネシア人ムスリム児童の宗教的価値形成—名古屋市における自助教育活動の事例から— 異文化コミュニケーション研究, **19**, 1-28.
- 樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文 (2010). 国境を超えるムスリム—滞日ムスリム移民の社会学— 青弓社
- 樋口康彦 (1997). 留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について—達成志向性・調和志向性の観点から— 実験社会心理学研究, **37** (2), 150-164.
- 井上晶子 (1999). アジア系ムスリム就労者のストレス対処—バングラデシュ・パキスタン・イラン出身男性を対象に— 東京大学大学院教育学研究科紀要, **39**, 256-264.
- 井上孝代・谷和明・土屋順一 (1997). 国費学部留学生の中途退学の実態 井上孝代 (編) 留学生の発達援助—不適応の実態と対応— 多賀出版, pp. 13-28.
- 石原翠 (2011). 留学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連—中国人留学生の場合— 異文化間教育, **34**, 136-150.
- イスラーム文化センター (2005). 相互理解を目指して—イスラーム—世界宗教の教えとその文明— イスラーム文化センター
- イスラーム文化センター (2009). イスラームという生き方—その50の魅力— イスラーム文化センター
- 岩男寿美子・萩原 滋 (1988). 日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析— 勁草書房
- 徐光興 (1996). 帰国留学生の対日イメージと態度に関する研究 名古屋大学教育学部紀要, **43**, 87-95.
- 葛文綺 (1999). 留学生の異文化適応に関する研究—来日目的、対日イメージと適応度との関連を中心に— 名古屋大学教育学部紀要, **46**, 287-297.
- 葛文綺 (2003). 中国人留学生の適応度に影響を与える個人属性について 学生相談研究, **23**, 274-283.
- 葛文綺 (2007). 中国人留学生・研修生の異文化適応 溪水社
- 神谷順子・中川かず子 (2007). 異文化接触による相互の意識変容に関する研究—留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果— 北海学園大学学園論集, **134**, 1-17.
- 岸田由美 (2009). 留学生の宗教的多様性への対処に関する研究：イスラーム教徒の事例を通して 2007 - 2008年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 研究成果報告書, 1-50.
- 岸田由美 (2011). ムスリム留学生の宗教的ニーズへの対応：現状と課題 留学生交流・指導研究, **13**, 35-43.
- 工藤正子 (2009). 関東郊外からムスリムとしての居場所を築く—パキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から— 文化人類学, **74** (1), 116-135.

- 店田廣文・村田久・高橋陽子・石川基樹・岡井宏文・北爪秀紀 (2006). 関東大都市圏における在日ムスリムの社会的ネットワークと適応に関する調査研究, 平成17年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書, 1-155.
- 店田廣文・岡井宏文 (2011). 外国人に関する意識調査 岐阜市報告書 早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室, 1-113.
- 宮島喬・太田晴雄 (編) (2005). 外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題 東京大学出版会
- 溝部明 (1990). イスラム教徒留学生のお祈りと飲食生活に関する調査報告書〔簡略版〕新潟大学教養部社会学研究室, 1-63.
- 水野治久・石隈利紀 (1998). アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究 カウンセリング研究, 31 (1), 1-9.
- モイヤー康子 (1987). 心理ストレスの要因と対処の仕方: 在日留学生の場合, 異文化間教育, 1, 81-97.
- 文部科学省中央教育審議会 (2008). 留学生30万人計画の骨子とりまとめの考え方に基づく具体的方策の検討 文部科学省 2008年7月8日
< http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_4/houkoku/1249702.htm > (2014年10月20日)
- 森永壽・杉万俊夫 (1993). 日本人大学院生とイスラム教徒大学院留学生の宗教意識・うが、行動の比較 社会心理学研究, 9 (1), 22-32.
- 名古屋大学留学生センター (2012). ムスリムの学生生活—ともに学ぶ教職員と学生のために 名古屋大学留学生教育センター, 1-23.
- 中村均 (1983). 東南アジアにおける日系企業の文化衝突と適応 アジア研究所紀要, 10, 105-133.
- 日本学生支援機構 (2014). 平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html (2014年10月20日)
- 岡益巳・深田博己 (1994). 中国人留学生と就学生の意識 岡山大学産業経営研究会研究報告書, 26 (1), 101-112.
- 岡益巳・深田博己・周玉慧 (1996). 中国人私費留学生の日本社会への適応とソーシャル・サポートの関係 岡山大学経済学会雑誌, 28, 1-28.
- 岡井宏文・石川基樹 (2011). 地域住民におけるムスリム・イスラームに対する意識・態度の規定要因—岐阜市調査の事例より— イスラーム地域研究ジャーナル, 3, 36-46.
- 奥西有理・田中共子 (2007). ホストのソーシャルスキル学習セッションに関する研究ノート: 予備的セッションの実施 岡山大学社会文化科学研究科紀要, 24 (1), 115-129.
- 奥西有理・田中共子 (2008). 日本人ホスト学生による文化的サポート: 留学生の異文化適応に関する

る支援的役割の検討 多文化関係学, **5**, 1-16.

太田晴雄 (2000). ニューカマーの子どもと日本の学校 国際書院

斉藤真理子 (1995). 留学生の適応と文化間距離—筑波大学留学生調査から 筑波大学比較・国際教育学研究室, **3**, 31-44.

佐藤真理子 (1996). 留学生の異文化適応—基礎的諸属性との関連 筑波大学比較・国際教育学研究室, **4**, 31-42.

佐々木康子・張瑜珊・鄭士玲 (2012). 中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか—修正版グランデットセオリー・アプローチに基づく視点提示型研究— 異文化間教育, **35**, 104-117.

佐々木陽子 (1997). 留学生の適応と日本人学生との親密化—留学生への質問紙調査をもとに 熊本大学留学生センター紀要, **1**, 217-240.

孫怡 (2009 a). 在日中国人留学生の異文化適応に関する研究：留学する直前のパーソナリティ・資源・適応の関連について 公募論文集, 65-71.

孫怡 (2009 b). 在日中国人留学生の異文化適応：パーソナリティ特性からの影響 お茶の水大学人間文化創成科学論叢, **12**, 241-248.

孫怡 (2011). 異文化適応の過程におけるパーソナリティの変化—在日中国人留学生を対象に— お茶の水大学人間文化創成科学論叢, **14**, 256-271.

鈴木康明 (1997). 相談活動からみた不適応の諸相 井上孝代 (編) 留学生の発達援助—不適応の実態と対応 多賀出版, 29-45.

周玉慧 (1993). 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み 社会心理学研究, **88** (8), 235-245.

湯玉梅 (2004). 在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究：対人行動上の困難の観点から 国際文化研究紀要, **10**, 293-327.

田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版

田中共子 (1995). 在日外国人留学生による日本人との対人関係の困難に関する要因認知 学生相談研究, **16** (1), 23-31.

田中共子 (1997). 異文化間適応スキル 江淵一公 (編) 異文化間教育入門 玉川大学出版部, 134-150.

田中共子 (1998). 在日留学生の異文化適応—ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から 教育心理学年報, **37**, 143-152.

田中共子・畠中香織・奥西有理 (2011). 日本人学生が在日留学生の友人に期待する行動—異文化間ソーシャル・スキルの実践による異文化間対人関係形成への示唆— 多文化関係学, **8**, 35-54.

田中共子・藤原武弘 (1992). 在日外国人留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進するための日本のソーシャルスキルの検討 社会心理学研究, **7** (2), 92-101.

田中京子・ストラーム ステファン (2013). 大学による多文化環境整備—ムスリム学生との協働の視

点から—ウェブマガジン 留学交流, 28, 1-9.

横林宙世・羅明坤 (2010). 日中異文化接触場面における意識調査：中国人大学生の場合 西南女学院大学紀要, 14, 147-162.